

「思春期の子育て支援講座」のオンライン実践に関する研究

Study on the on-line practice of adolescent parenting support seminar

澤 聡 一

SAWA Toshikazu

問題と目的

現代の日本社会における重要な社会的テーマの一つに、子育て支援がある。少子化対策や、児童虐待の防止にもつながる子育て支援への注目は高く、2023年度からは「子育て支援に関する基本的な政策の企画及び立案並びに推進（内閣官房 こども家庭庁設置法（令和4年法律第75号）の概要より）」を担う子ども家庭庁が創設されることも決まっている（内閣府、2022）。

子育て支援の一環として、さまざまな子育て講座やペアレント・トレーニング等が市町村や関係団体によって行われている。厚生労働省（2019）が障害者総合福祉推進事業の一環として刊行したペアレント・トレーニング実践ガイドブックによると、日本においては1990年代から発達障害のある子どもの親などに向けて、肥前式、精研式、奈良式、鳥取大学式などの実践が発展してきた。これらは「子どもの良いところ探し&ほめる」「子どもの行動の3つのタイプわけ」「子どもが達成しやすい指示」「子どもの不適切な行動への対応」「環境調整（行動が起きる前の工夫）」「行動理解（ABC分析）」を共通要素（コアエレメント）としており、2022年の「児童福祉法等の一部を改正する法律（令和4年法律第66号）」で新設された「親子関係形成支援事業（親子関係の構築に向けた支援）」においても重視されている。発達障害のある子どもの親に向けたプログラム以外に、Nobody's Perfectプログラム（Catano, 1997 三沢・幾島訳, 2002）や、トリプルP前向き子育てプログラム（加藤・柳川, 2010）、PCIT（親子相互交流療法：加茂, 2020）など欧米発祥のプログラムも広く用いられており、WHO（2013）は、親と子どもの良好な関係を促すことや子育ての技術を身につけることは児童虐待の防止に効果的であると指摘している。

なお、これらの実践の多くは、乳幼児期ないし児童期の子ども（発達障害の子ども）を持つ親を対象としているが、中には思春期以降の子育てを対象とした実践もある。たとえば上記のトリプルPは思春期向けのプログラムを設けているほか、子どもとの適切なかかわり方を学ぶプログラムであるCARE（Child-Adult Relationship Enhancement：木村他, 2022）や、アドラー心理学に基づく親学習プログラムであるSTEPでも思春期版が作成されている（松崎, 2007）。

このように、多様な展開と社会への広がりを見せる子育て講座だが、子育てに求められる知識や技術の習得を目指すだけでなく、子育ての孤立を防ぐために交流の機会が設けられてい

ることが多い。しかし2019年末からの新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的な感染拡大により、対面での交流が行えなくなったことから、オンラインビデオ会議システムなどを用いた非対面での子育て講座の実践も多く生まれた。たとえば川崎他（2021）は、本来対面で行われるPCITを、オンラインビデオ会議システムを用いて行うI-PCITを国内で実践した事例を報告し、コロナ禍における支援としての有効性を述べている。

筆者は2019年より大学において一般の子育てと支援者の研修を兼ねた思春期の子育て支援講座を継続実施しているが（澤，2021），前記の通りコロナ禍によって対面での実施の中止を余儀なくされ、2020年度以降はオンラインによる実践を継続している。そこで本研究では、いまだ実践報告が少ない思春期の子育てを対象としたオンラインによる子育て支援講座について報告を行うと共に、その意義と課題について検討した。

方 法

A大学が地域に向けて実施する無料のオンライン教養講座の一つとして、「思春期の子育て講座」を開講した。オンラインによる実施となった2020年度以降の実践と調査の方法を以下に示す。

I. 2020年度 動画配信サービスを用いた実践

参加者・手続き

「青年心理学から学ぶ思春期・青年期の子育て講座2020」として、全3回・5本（第1回と第2回は各2本の動画を公開）の動画を作成し、講座の申込者を対象に無料で限定公開した（後に、A大学ホームページで公開した無料動画でも配信URLを紹介した）。公開に際して、オンライン動画配信サービスであるYouTubeが使用された。講座の申込者は62名だった。なお各回の視聴回数は、第1回（1）が146回、（2）が98回、第2回（1）が83回、（2）が75回、第3回が50回であった。

各回の受講者には、視聴後に任意でアンケートへの回答を求めた。第1回のアンケートの回答者は8名（平均年齢53.0歳、思春期の子どもを持つ割合50.0%）、第2回（1）のアンケートの回答者は8名（平均年齢58.6歳、思春期の子どもを持つ割合62.5%）、第2回（2）のアンケートの回答者は5名（平均年齢58.6歳、思春期の子どもを持つ割合60.0%）、第3回のアンケートの回答者は1名であった。

材料

視聴後アンケートでは、以下の点について尋ねた。

基本属性 回答者の性別と年齢、「思春期の子ども（概ね10～30歳まで）」の有無とその性別・年齢

講座体験の評価 講座体験を評価する目的で、子育て支援プログラム体験尺度（平石・渡邊，2009）より、因子負荷量の高い項目を抜粋した7項目への回答を求めた（5段階評定）。なお、澤（2021）でも同一の項目を用いた。

講師への質問・要望 寄せられた質問について、第3回講座にて回答を行った。

各回の講座の感想 自由記述形式で感想を求めた。

2020年度 講座の概要

各回のテーマを表1に示す。なお各回のテーマ及び内容は、前年度実践（澤，2021を参照）を元に選定し、動画配信によるオンデマンド形式ながら、心理尺度の紹介や質問に回答する回（第3回）を設けるなど、双方向性に留意した。

表1 動画配信サービスを用いた実践（2020年度実践）

第1回	思春期・青年期の親子関係（2020年10月公開）
	（1）思春期・青年期に何が起きるのか？
	（2）思春期・青年期の子どもと関わるストレス・マネジメント
第2回	思春期・青年期の心の危機（2020年12月公開）
	（1）対人不安と不登校
	（2）発達障害と個性
第3回	思春期・青年期の子育ての疑問に答える（2021年2月公開）
	* 第1回・第2回の受講者アンケートにおける質問に回答する内容

以下、各回の概要を示す。

第1回 思春期・青年期の親子関係（2020年10月公開）

「（1）思春期・青年期に何が起きるのか？（33分14秒）」と「（2）思春期・青年期の子どもと関わるストレス・マネジメント（31分50秒）」の2本の動画を作成し、公開した。

（1）では、思春期・青年期における生物・心理・社会的変化についての解説や、反抗期および親子関係の理解、ほめ方やしかり方の説明などを行った。また、参加者（視聴者）が自身の子育て態度を振り返るために「思春期の子育て態度尺度（平石，2007）」の紹介も行った。

（2）では、「ストレス」概念の説明と共に、思春期・青年期の親子関係において生じがちなストレスとその対処（コーピング）についての解説を行った。コーピングでは、自身の認知的特徴やコーピングのセルフチェック（島津，2003）、呼吸法・筋弛緩法などのリラクゼーション技法の紹介等を行った。

第2回 思春期・青年期の心の危機（2020年12月公開）

「（1）対人不安と不登校（40分4秒）」と「（2）発達障害と個性（41分31秒）」の2本の動画を作成し、公開した。

（1）では、思春期・青年期の対人恐怖心性（永井，1994）や不登校の実態の説明、佐賀県教育センター（2005）の心のエネルギー曲線等による不登校の時期に応じた関わりのモデル、

青木（2020）による青年の居場所に関する説明などを行った。また、第1回に続く心理尺度の例として、「曖昧さへの態度尺度（西村，2007）」を紹介した。

（2）では、注意欠如・多動性障害AD/HDと自閉症スペクトラム障害（ASD）を中心に、英国自閉症協会（National Autistic Society）によるSPELL（Structure, Positive approaches and expectations, Empathy, Low arousal, Links）モデルや、「統合版困り感尺度（高橋，2012）」を紹介すると共に、模擬事例を通して発達障害の青年の強みを探すワークなどを取り入れた。

第3回 思春期・青年期の子育ての疑問に答える（2021年2月公開）

第1回・第2回の受講者アンケートにおける質問に回答する内容で、55分54秒の動画を公開した。「コーピングについて」「不登校と病院受診について」「自傷行為と発達障害について」「子育てにおける夫婦の価値観のズレ」などの質問に対し、スライドを用いて説明を行った。

Ⅱ. 2021年度 オンラインビデオ会議システムを用いた実践

2020年度実践を踏まえ、感染対策のためのオンライン実施のなかでも双方向性を強化した実践を行うため、新たにオンラインビデオ会議システムを用いた「思春期の子育て講座」を実施した。全体のテーマは「思春期の子どもと関わるためのペアレント・トレーニング」とし、全4回の講座を開講した。

参加者・手続き

前年度までと同様、A大学の教養講座として告知を行った。その際、オンラインビデオ会議システムを使用すること、安全なインターネット接続の利用や第三者が視聴することのない環境での参加等を求めた。申込者には、事前にwebアンケートフォームを用いて、「録音・録画の禁止」「交流活動中は可能な限りカメラオン」「交流活動中に得られた情報の守秘」などへの同意を求めた。

最終的に5名が参加し（平均年齢52.4歳）、うち思春期の子育てを実際に行っている親は3名であった。各回90分・全4回の講座はすべてZoomを用いて開催され、延べ参加者数は16名だった（平均参加人数4.0名）。また、臨床心理学を専攻する大学院生が毎回1名、スタッフとして参加した。

なお、講座全体の終了後に任意で講座体験について尋ねる個別のオンラインインタビューの協力者を募ったところ、2名が応じた。

材料

(1) 事前アンケート

参加の同意確認（前項を参照）に加えて、講座の開始前に事前アンケートとして以下の項目について尋ねた。調査時期は2021年8月だった。

基本属性 回答者の性別と年齢、「思春期の子ども」を持つ、または関わる機会の有無とその性別・年齢等、職業など。

講座に対するニーズ 講座への参加を通して知りたい、学びたいと思っていることなどについて、自由記述による回答を求めた。

思春期の子育て態度尺度（平石，2007） 講座への参加を経た思春期の子育て態度の変容について検討する目的で、講座開始前の事前アンケートと講座終了後の事後アンケートの際に、計2回実施した。なおコロナ禍における実施であることを踏まえて因子構造を再検討し、澤（2022）による4因子構造（「主体性を尊重した対話的姿勢」「適切な心理的境界」「威厳ある姿勢」「不安定な態度」）を用いた。

その他 Zoomの使用経験や事前の接続確認の希望等について尋ねた。

(2) 事後アンケート

全4回の講座が終了した後に、事後アンケートとして講座の参加者5名に以下の項目についての回答を求めた。調査時期は2022年3月だった。

参加目的の達成 講座に参加したいと考えた当初の目的の達成度について、「非常によく達成された」「ある程度達成された」「どちらともいえない」「あまり達成されなかった」「まったく達成されなかった」の5段階評価で回答を求めた。

特に印象に残った内容 印象に残った回を複数選択方式で尋ねると共に、その具体的な内容について自由記述による回答を求めた。

講座全体の感想 講座全体を通しての感想等について、自由記述形式での回答を求めた。

その他 オンラインビデオ会議システムを用いた講座に参加した印象や、開講頻度・時間の設定、今後学びたいと感じたテーマなどについて、自由記述形式での回答を求めた。

思春期の子育て態度尺度（平石，2007） 上掲の通り。

(3) オンラインインタビュー

講座全体の終了後に、講座体験に関するオンラインインタビューの協力者を募ったところ、2名が応じた。基本属性を表2に示す。

インタビューはwebフォームによる参加同意の確認後に、Zoomを使用して行った。事後アンケートの回答内容をもとに、「講座の参加動機」「参加の感想」「講座について気がついたこと」等について、1回50分程度の半構造化面接をおこなった。回答終了後に、協力への謝礼を渡した。

表2 オンラインインタビュー協力者（2021年度実施）

	A	B
年齢・性別	50代女性	50代女性
基本属性	中学生の子どもや親と関わる職業に従事している	子育てを終え、地域活動等で子どもと関わる機会がある

2021年度 講座の概要

各回のテーマを表3に示す。毎回の講座では、講師による話題提供（講話）のほかに、話題についての理解を深化するための参加者間の意見交流や討議、コミュニケーション技術の習得などを目標としたロールプレイ等を行った。

表3 オンラインビデオ会議システムを用いた実践（2021年度実践）

<p>第1回 思春期の心の理解とコミュニケーション（2021年9月開講）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思春期の子どもと関わる雰囲気づくり ・思春期の子どもと関わるコミュニケーションとロールプレイ ・ストレスとリラクゼーション
<p>第2回 子どもの個性や趣味とのつきあい方（2021年11月開講）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思春期の子どもの趣味（コロナ禍におけるゲーム・ネット利用など） ・子どものころに好きだった遊びと、子どもにとってのゲーム等の意義の検討 ・発達障害と余暇活動支援 ・架空事例を通じた趣味への声掛けの仕方の検討
<p>第3回 思春期の子どもの気になる行動（2022年1月開講）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自傷行為や市販薬依存などについて ・行動分析の解説と行動分析を用いた行動理解の演習 ・不登校と居場所、思春期の居場所についての情報交換
<p>第4回 思春期の子と親が共に育つために（2022年3月開講）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思春期以降の親子関係の変化 ・親自身の発達 ・セルフ・コンパッションの解説、気もちに名前を付けるワーク

以下、各回の概要を示す。

第1回 思春期の心の理解とコミュニケーション（2021年9月開講）

最初に、各参加者の自己紹介から講座を開始した。思春期の子どもの基本的な特徴を解説した後に、思春期の子どもが話しやすい雰囲気づくりや声かけのコツについて参加者間で話し合う時間を設けた。挙げられた意見等は講師が画面上にメモを取り、全体で共有した。

その後、具体的なコミュニケーションの留意点について解説し、「親」役と「子ども」役に分かれたロールプレイを行った。最後に、子どもと親のストレスと対処法（コーピング）、リラクゼーション法の体験を行った。講座の終了後、任意参加で参加者間の交流の時間を設けた。なお、この講座終了後の任意での交流機会は、第2回以降も継続して実施した。

第2回 子どもの個性や趣味とのつきあい方（2021年11月開講）

コロナ禍によって注目が高まったインターネットやゲームの利用状況について、国立成育医療研究センター（2021）などの調査結果を紹介しながら解説を行った。特に肯定的な側面に注目してコミュニケーションを行うため、親子それぞれの「子どものころに好きだった遊び」を挙げ、子どもにとってのゲームやインターネット利用の意義について議論を行った。

次に、子どもの個性として発達障害の話題を取り上げ、余暇活動支援（加藤，2021）の解説を行うと共に、架空事例を通して発達障害の傾向が想像される子どもの趣味への声掛けの仕方についての議論と解説を行った。

第3回 思春期の子どもの気になる行動（2022年1月開講）

第3回からの参加者がいたため、改めて自己紹介を行った。コロナ禍で増加が危惧されているメンタルヘルス上の危機の例として自傷行為や市販薬への依存の話題を紹介し、架空事例とその議論を通して、自傷行為や依存についての理解を深めた。

また、問題とされる行動の理解のために、行動分析の手法を紹介し、別の架空事例を用いて思春期の子どもの行動を理解するための演習を行った。加えて、不登校と時期に応じた支援の解説を行い、不登校やメンタルヘルス上の危機を抱えた子どもの居場所についての情報交換を行った。

第4回 思春期の子と親が共に育つために（2022年3月開講）

第3回終了後に参加者から寄せられた情報を共有した後に、思春期の親子関係を振り返る時間を設けた。その共有後に成人期の発達課題を紹介し、セルフコンパッション（Neff, 2011 西村他訳, 2021）についての解説と、関連動画の共有を行った。また、ポストカード・フォーカシング（大出, 2005）の手法を援用し、「気もちに名前をつけるワーク」として、呈示したイラストの中から気になったイラストを選択し、その絵が気になった理由を言葉にするワークを行った。

最後に、講座全体の振り返りを行い、終了とした。

結果と考察

I. 2020年度（動画配信サービス形式）の結果と考察

子育て支援プログラム体験尺度の結果の分析

子育て支援プログラム体験尺度（平石・渡邊, 2009）について、回答者が1件のみだった第3回の結果を除外し、実施回・内容（第1回（ $n=8$ ）および第2回（1）（ $n=8$ ），第2回（2）（ $n=5$ ））を独立変数、子育て支援プログラム体験尺度（平石・渡邊, 2009）の抜粋7項目を従属変数とする分散分析を行った結果、すべての項目において実施回・内容による有意な差は認められなかった（ $\alpha=0.05$ ）。

そのため、実施回・内容を考慮しない2020年度講座全体の子育て支援プログラム体験尺度の評価（ $n=22$ ）と、2019年度に対面で実施した全5回の講座全体の子育て支援プログラム体験尺度の評価（ $n=76$ ）について、 t 検定による項目ごとの検討を行った。その結果、「つらい気持ちになった」についてのみ、2020年度動画配信サービスによる実施の方が、2019年度対面による実施よりも有意に高いことが示された（ $t(63)=3.78, p<.01$ ）。なお、「子どもの気持ちを考える機会になった」「新しい知識が得られた」「おもしろかった」「また参加してみたいと思った」は、2020年度実施及び2019年度実施において、天井効果が認められた。結果を表4に示す。

表4 子育て支援プログラム体験尺度の基本統計量と t 検定の結果（2020年度／2019年度）

	2020年度（動画配信）	2019年度（対面）	t 値
子どもの気持ちを考える機会になった	4.55(0.60)	4.51(0.68)	0.268
新しい知識が得られた	4.50(0.51)	4.66(0.47)	1.308
おもしろかった	4.45(0.74)	4.63(0.58)	1.052
また参加してみたいと思った	4.59(0.67)	4.64(0.60)	0.318
子育ての悩みが解消された	3.36(0.90)	3.54(0.76)	0.850
自信が持てた	3.36(0.79)	3.52(0.80)	0.831
つらい気持ちになった	2.41(0.59)	1.75(1.05)	3.778**

** $p<.01$

各回の参加者感想（自由記述）の計量テキスト分析

各回の講座参加の感想として、12件の自由記述が得られた。KHコーダー3（樋口，2020）を用いて、計59文を対象とする共起ネットワークを作成した。結果を図1に示す。

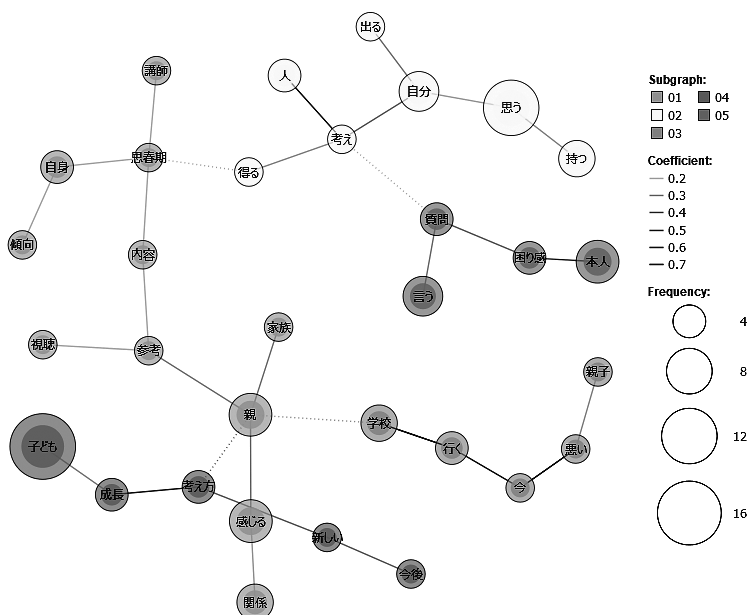


図1 2020年度講座参加者の感想についての共起ネットワーク図

上記の結果から、2020年度講座の受講を通して、「思春期の親や家族との関係について（例「親子関係について、自身の状況を知る機会になった」）」「自分の考えについて（例「子どもに自分の考えを押し付けないように気をつけたい」）」「登校について（例「学校に行くことについての親子の考え方の違いについて知ることができた」）」「子どもの成長について（例「新しい視点から子どもの成長についての考え方を知ることができた」）」「子どもの個性について（例「困り感質問紙を通して、本人の思いを知ることができた」）」などに関する記述が得られたことが示された。

2020年度実践の考察

A大学にとって初のオンラインを用いた教養講座の一つとして開講されたが、講座に対して62名の申し込みがあり、5本の動画で計452回の視聴が行われた。正確な参加者数・視聴数は不明だが、コロナ禍以前の前年度に実施された対面形式の講座（2019年度実践）には計47名が申し込み、全5回の延べ参加者数が92名だったことを考えると、動画配信形式にしたことで、より多くの層が参加できる機会となったと思われる。中には対面での参加が困難な遠方からの申し込みもあり、コロナ禍においてニーズが高まっていた思春期の子どもとのかかわり方を考える機会となったと思われる。視聴回数から複数回視聴されたケースもあると思われ、自身のペースに合わせて視聴できる動画配信形式ならではのよさの一つであると言えよう。

他方で、アンケートの回答件数が極端に少なかった点は大きな課題であり、心理尺度の紹介やリラクゼーション法の演習に関する解説等を行ったり、質疑応答の回を独立して設けるなどしたものの、双方向性には大きな課題が残る結果となった。この点について、2021年度からはオンラインビデオ会議システムを用いた実践へと実施方式を変更している。

また、子育て支援プログラム体験尺度（平石・渡邊，2009）の結果から、オンラインによる動画配信サービスを用いた実践でも、特に思春期の子どもの理解や新たな知識の習得、知的好奇心の充足などについては、対面での実践と遜色ない効果が挙げられる可能性が示されたが、内容に伴う負担感（「つらい気持ちになった」）については動画配信形式の方が有意に高いことが示された（表4）。対面では、受講者同士での交流やその場でのフォローなどが可能であるが、一方通行の動画配信形式ではそれらの対応は不可能であり、内容や構成などによって生じる負担感に特に注意する必要がある。

講座全体の感想についての計量テキスト分析（共起ネットワーク図の作成）の結果からは、「思春期の親や家族との関係について」「自分の考えについて」「登校について」「子どもの成長について」「子どもの個性について」などに関する記述が得られたことが示された。本講座全体、ないし各回の内容に即した感想等の記述が多く得られ、個別のトピックとしては不登校や発達障害についての関心の高さが示唆された（図1）。

II. 2021年度（オンラインビデオ会議形式）の結果と考察

事前および事後アンケートの結果

事前および事後アンケートで共通して実施した思春期の子育て態度尺度（平石，2007）の結果について，事前アンケートと事後アンケートの因子得点ごとの平均値の差を，対応のあるt検定を用いて検討した（ $N=5$ ）。その結果，「不安定な態度」についてのみ，講座開始前（事前アンケート）よりも講座受講後（事後アンケート）の方が有意に低下したことが示された（ $t(4)=3.721$, $p<.05$ ）。結果を表5に示す。

なお，参考までに澤（2022）で用いたweb調査による同尺度の平均値，標準偏差を併記した。

表5 思春期の子育て態度尺度の基本統計量とt検定の結果（2021年度事前/事後他）

	事前アンケート	事後アンケート	t値	(参考) 澤(2022) ; $N=290$
主体性を尊重した対話的姿勢	29.03(5.9)	28.20(7.36)	0.712	28.22 (5.52)
適切な心理的境界	21.20(3.19)	22.60(5.2)	1.157	19.56 (4.05)
威厳ある姿勢	12.20(0.98)	12.80(1.47)	0.741	12.76 (2.96)
不安定な態度	20.80(4.02)	17.60(5.54)	3.721*	18.04 (5.45)

* $p<.05$

事前アンケートにおいて，講座へのニーズとして「悩みごとの相談と相談方法」「子どもが落ち込んでいるときのかわり方」「子どもが本当のことを言えるようになるための方法」「子どものストレス対処法」「発達に偏りがある子どもへの声かけや親の受け止め方」等が記された。事後アンケートにおいて，講座全体を通したニーズの達成度を確認したところ，「非常によく達成された」4件，「ある程度達成された」1件であった。

また，事後アンケートにおいて「特に印象に残った回（複数回答可）」の集計結果とその主な理由について，表6に示す。なお，第4回に関する特定の理由の記述はなかった。

表6 2021年度実践で特に印象に残った回とその主な理由

第1回 思春期の心の理解とコミュニケーション（特に印象に残った=2件） （印象に残った理由）	・子どもがちょうど思春期に入ったため，状況をリアルタイムで考えることができた
第2回 子どもの個性や趣味とのつきあい方（特に印象に残った=3件） （印象に残った理由）	・その子の強み，対処法を知るヒントになるかわりを知った ・二次障害に悩んでいる子どもが多くいるように感じた
第3回 思春期の子どもの気になる行動（特に印象に残った=5件） （印象に残った理由）	・思春期を迎える子どもの心理を理解できた ・不登校の子どもに対する取り組みなどを知る事ができた ・1日1日を無事に過ごせるようにじっくり向き合って育てることが重要と感じた
第4回 思春期の子と親が共に育つために（特に印象に残った=3件）	

事後アンケートにおけるオンラインビデオ会議システムを用いたこと等の印象について、「自宅に居ながら参加しやすくよかった」「家族の介護のために家を離れられなくても参加できてよかった」「悪天候の際でも無理なく参加できてよかった」などの回答が得られた一方で、「少人数なのでグループワークの必要はなかったのでは」「対面での参加だと一層理解が深まったと思う」などの回答も寄せられた。

講座終了後の参加者感想（自由記述）の計量テキスト分析

講座全体の感想として、5件の自由記述が得られた。KHコーダー3（樋口，2020）を用いて、計17文を対象とする共起ネットワークを作成した。結果を図2に示す。

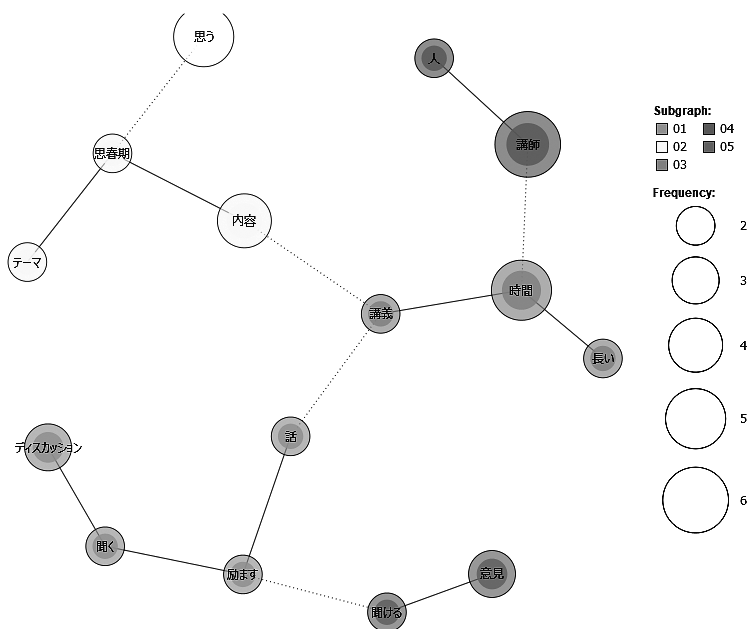


図2 2021年度講座参加者の感想についての共起ネットワーク図

上記の結果から、2021年度講座の受講の全体を通して、「思春期を扱ったことについて（例「思春期をメインテーマとしたことがよかった」）」「時間配分について（例「もう少し長い時間でもよかった」）」「ディスカッションについて（例「他の参加者の話を聞いて励まされた」）」「意見交換について（例「他者の意見を聞いてよかった」）」「講師について（例「講師の実践の実例を聞きたい」）」などに関する記述が得られたことが示された。

参加者インタビューの検討

講座に参加した2名の協力を得て、事後アンケートの回答内容をもとに、「講座の参加動機」「参加の感想」「講座の課題やその他気がついたこと」等について個別のオンラインインタビューを実施した。結果を表7に示す。

表7 2021年度講座参加者のオンラインインタビュー結果のまとめ

質問	カテゴリ	回答例
参加動機	テーマへの関心	・市の広報をみて、特に、「ペアレント・トレーニング」に関心を持った。職場でも思春期の子どもや親と関わる機会があったが、ペアレント・トレーニングは未体験だった(A)。
	オンライン実践であること	・ボランティアなどを積極的に行いたかったが、家庭の事情やコロナ禍によりなかなか行えずにいた。現場から離れている不安もあったので、オンライン講座がありがたかった(B)。
参加の感想	内容に興味	・たくさんの症状が重なっているという話題(第2回)や、親も成長すること、フォーカシング的な体験などが興味深かった(第4回)(B)。
	情報交流の意義	・他の参加者から、いろいろな研修会や書籍などの情報を聞いたのも勉強になった(B)。
	情報発信の可能性	・第3回の内容について、親も子も「居場所」がなかなか見つからず、家の中で悪循環が生じているという点を考えた。関連の情報をもっと伝えていく場にもなれば(A)。
	オンライン交流の難しさ	・もっといろいろ話したいときもあったので、オンライン越しの難しさも感じた。学生が進行をしてくれたのはよかった(B)。
	内容の更なる充実	・現場で顕在化している問題や、具体的な支援の実際、「ペアレント・トレーニング」についてもっと知りたい思いもあった(A)。
課題やその他気がついたこと	参加目的に応じた実践	・もっと講師の話を聞きたいという思いが強い人と、交流をしたい人がいると思う。参加者によって目的が違うのかも。もしコース別で行われたら、支援者対象の内容に参加したい(A)。
	広報の充実	・講座のことがあまり知られていないので、続けて実施し、広報にも力を入れてほしい。親も大変で、思春期の子どもの受け皿になっている児童会館や放課後等デイサービスも大変(B)。

* () は回答者

今回のインタビューの対象者は、現在思春期の子どもを育てている保護者ではないが、それぞれの活動等を通してその支援やかかわりに関心を持っており、「テーマへの関心」や「オンライン実践であること」から参加を申し込んだことが示された。参加した結果、「内容に興味」を持ったほか、「情報交流の意義」を感じ、「情報発信の可能性」も感じたことが示された。他方で、「オンライン交流の難しさ」や「内容の更なる充実」も求められた。そのほか、「参加目的に応じた実践」や「広報の充実」などが課題として挙げられた。

2021年度実践の考察

5名の参加者全員が、「参加目的は非常によく達成された」等、講座への参加体験を肯定的に評価した。具体的な内容としては、特に不登校や自傷行為などの話題を扱った「第3回 思

春期の子どもの気になる行動」が特に印象に残ったことが示された（表6）。

また、講座参加の前後における思春期の子育て態度尺度得点の変化から、講座に参加したことによって思春期の子育て態度における「不安定な態度」得点が有意に低下したことが示された（表5）。この点について、講座参加体験の自由記述の共起ネットワーク図から、テーマに関する記述の他に参加者同士の交流や議論、講師に関する記述が確認された（図2）。講座内容から知識を得たことだけではなく、他の参加者や講師との交流を通して自身のかかわりを肯定的に見直した結果、子育てにおける「不安定な態度」が低下した可能性がある。オンラインビデオ会議システムを用いた同時双方向の交流の意義が、一定程度示されたと言えよう。

インタビューでは、上記に関するより詳細な知見を得ることができた。2021年度の講座には、現在思春期の子どもを育てている保護者以外にも参加しており、インタビューの協力者も子育て中の保護者ではなかったが、日頃から思春期の子どもや親と関わっている経験を通して、講座で扱うテーマの意義や情報交流としての意義が確認されたと同時に、情報発信の場としての可能性や実践形態に関する様々な助言も寄せられ、親自身だけではなく支援者にも学習や交流の機会が求められていることが示唆された（表7）。

心理援助の国家資格である公認心理師には、支援を要する者への直接的な支援だけではなく、関係者に対する相談及び助言、指導その他の援助や、心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供も求められている（公認心理師法第二条）。特に大学で行う「子育て講座」として、支援者支援や情報交流・情報発信の機能も今後一層求められると思われる。

Ⅲ. 総合考察

2019年度末からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、2020年度から2021年度にかけて、異なる実践形態でのオンラインによる「思春期の子育て講座」を開催した。

動画配信方式によって実施した2020年度の講座の結果から、遠方の居住者の参加を含めて対面での実施形式以上に多くの層の参加が得られたことが示された。また、子育て支援プログラム体験尺度（平石・渡邊，2009）の結果から、思春期の発達や支援に関する知的理解等については対面で行われた2019年度の実践と遜色ない効果が得られたことが示唆された一方で、動画配信による実践の負担感が大きかった可能性も示され、一方通行の動画配信形式によるリスクも示された。

上記の結果を踏まえ、2021年度の講座では、オンラインビデオ会議システムを用いることによって双方向性を強調した。双方向の交流による安全性を確保するために、機材の準備や事前の参加同意を含む参加のハードルが上がり、参加者数は大幅に減少したが、講座に関する自由記述の分析結果や参加者インタビューの結果から、参加者や講師との交流を肯定的に評価する報告が多く確認された。講座参加の前後における思春期の子育て態度尺度得点（平石，2007）の変化から、講座に参加したことによって「不安定な態度」得点が有意に低下したことが示さ

れたが、上記の双方向の交流による効果が大きく影響したものと思われる。

なお、2020年度、2021年度共に特に印象に残った講座テーマとして、不登校や思春期のメンタルヘルス、発達障害などの話題が多くあがった。インターネット調査会社の協力を得て思春期の子育てニーズについて調査した澤（2022）の結果からは、「特にない」「わからない」や、相談窓口・金銭的支援等を求める記述に続き、思春期の子育てに関する情報や、具体的な悩みに関するニーズも高いことも示されている。「不登校」「発達障害」など思春期以降に顕在化しやすいテーマについて広く発信する機会を通して、その後の相談援助等の利用可能性を高める意味も大きいと思われる。

なお、2022年度と同講座では、前半は講座形式、後半は討議と交流を中心とした形式での実践を行い、匿名性を保証した前半のみの参加も可能とした。本論の執筆時点で継続実施中のため、詳細は別の機会に譲るが、2回の講座を実施した時点で前半の講座の参加者数は各回15名を超え、後半の参加者数も6～7名と、同じオンラインビデオ会議システムを用いた2021年度実践よりも概ね増加している。いずれまた対面での実施が中心になる時期も訪れると思われるが、特に北海道のように広域での実践を行う場合、居住地を問わずに参加できるオンラインを用いた実践の意義は大きい。子育て（支援）講座のオンライン実践について、内容と共に、様々な実践形態を模索していくことが今後も望まれる。

<付記>

本研究は、JSPS 科研費（JP17K04437）の助成を受け、北翔大学倫理審査委員会の承認を得て実施された。また、本論文の一部のデータ（2021年度実践）は、第2回日本公認心理師学術集会での発表を行った。

本講座に参加し、アンケートへの回答やインタビュー等に快く応じていただいた参加者の皆さまや、広報等にご協力いただきました関係の皆さまに、この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

文 献

- 青木省三（2020）. 思春期の心の臨床 [第3版] 金剛出版
- Catano, J. W. (1997). *Nobody's Perfect*. The Minister of Public Works and Government Services. (ジャニス・ウッド キャタノ 三沢直子（監修）・幾島幸子（訳）（2002）. 完璧な親なんていない！ カナダ生まれの子育てテキスト ひとなる書房）
- 樋口耕一（2020）. 社会調査のための計量テキスト分析（第2版）－内容分析の継承と発展を目指して－ ナカニシヤ出版
- 平石賢二（2007）. 思春期の子どもをもつ親の心理的ストレスと子どもの人格発達に与える影響 平成15～18年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書.

- 平石賢二・渡邊賢二 (2009). 思春期の子育て支援プログラム—養育態度尺度を用いた自己理解促進の観点から— 日本家族心理学会第26回大会発表論文集, 104.
- 加茂登志子 (2020). PCITから学ぶ子育て 小学館
- 加藤浩平 (編著)・柘植雅義 (監) (2021). 発達障害のある子ども・若者の余暇活動支援 金子書房
- 加藤則子・柳川敏彦 (2010). トリプルP～前向き子育て17の技術～ 診断と治療社
- 川崎雅子・坂寄里紗・加茂登志子 (2021). コロナ禍における子育て支援 —インターネット親子相互交流療法 (Internet-delivered Parent-Child Interaction Therapy: I-PCIT) 子どものこころと脳の発達, 12(1), 71–78.
- 木村一絵・石垣和子・加茂登志子・福丸由佳・重松由佳子・賀村悦子・小柳愛子・内田絵利子 (2022). 2–6歳の幼児の問題行動が減少することを希望した母親に対する地域保健における子育てプログラム Child-Adult Relationship Enhancement (CARE) の効果—ランダム化比較試験— 石川看護雑誌, 19, 65–76.
- 国立成育医療研究センター (2021). コロナ×こどもアンケート第4回調査報告書 Retrieved November 20, 2022 from https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/index.html
- 厚生労働省 (2019). ペアレント・トレーニング実践ガイドブック Retrieved November 20, 2022 from <http://www.rehab.go.jp/ddis/data/guide/right/>
- 松崎 学 (2007). アドラーの親支援プログラムSTEP 家族心理学年報, 25, 46–58.
- 永井 徹 (1994). 対人恐怖の心理—対人関係の悩みの分析— サイエンス社
- 内閣府 (2022). こども家庭庁設置法 (令和4年法律第75号) の概要 Retrieved November 20, 2022 from https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodomo_seisaku_suishin/index.html
- Neff, K. (2011). *Self-Compassion: the proven power of being kind to yourself*. Peters Fraser & Dunlop Group Ltd. (クリスティン・ネフ 石村郁夫・樫村正美・岸本早苗 (監訳) (2021). セルフ・コンパッション [新訳版] 金剛出版)
- 西村佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性との比較を通して— パーソナリティ研究, 15(2), 183–194.
- 大出美知子 (2005). ポストカードフォーカシング 福盛英明・森川友子 (編著)・村山正治 (監修). マンガで学ぶフォーカシング入門 誠信書房, pp.99–101.
- 佐賀県教育センター (2005). 心のエネルギー曲線 Retrieved November 20, 2022 from https://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h16/03hutokou/rikai/main_rikai.htm
- 澤 聡一 (2021). 大学における「思春期の子育て支援講座」の実践に関する研究 北翔大学教育文化学部研究紀要, 6, 53–62.
- 澤 聡一 (2022). 「思春期の子育て」に関する支援ニーズの探索的検討 —思春期の子育て態

度に着目して－ 日本学校心理学会第24回大会発表論文集, 44.

島津明人 (2003). じょうずなストレス対処のためのトレーニングブック 法研

高橋知音 (2012). 発達障害のある大学生のキャンパスライフサポートブック 学研

WHO (2013). *Preventing violence: evaluating outcomes of parenting programmes*.

Retrieved November 20, 2022, from <https://www.who.int/publications/i/item/preventing-violence-evaluating-outcomes-of-parenting-programmes>